

はじめに：出血性疾患である血友病は、関節障害をはじめ多くの問題が生涯にわたり続くため包括的アプローチによる QOL の向上が治療目標の一つとなる。昨年の本大会で SF-36 を用いた血友病患者の健康関連 QOL に関する全国調査を報告した。その結果と諸外国から報告されている血友病患者の健康関連 QOL を比較検討したので報告する。

方法：血友病患者を対象としたアンケートによる横断調査。血友病の基本情報と SF36 のスコアから QOL 低下につながる要因を諸外国の報告（8 編）と比較検討した。

結果：対象は 16 歳以上の日本国内の血友病患者 670 人（平均年齢 42.2）。いずれの報告でも SF-36 のスコアが低下し、身体的側面のスコアの低下が目立っていた。加齢に伴うスコアの低下は各報告共通だが、我が国では 25 歳以上の群で年齢に伴い低下していた一方で、イタリアの報告では 45 歳以上になって低下していた。重症度別では、諸外国とも軽症の低下はわずかで、中等症と重症は同様に低下していた。出血や不自由な関節があると身体的側面のスコアが低下することも各報告共通であった。本調査では SF-36 すべてのスコアが出血頻度と負の相関を示したが、他の報告では一部にみられたのみであった。

考察：本調査は我が国初の全国規模で行われた血友病患者の QOL 調査である。我が国の血友病診療体制は諸外国とは血友病センターの整備や凝固因子製剤の使用法などに違いがある。今後欧州のようにセンターの普及や早期からの補充療法が行われることで健康関連 QOL の低下が防止できるのか観察してゆく必要がある。